

# 「看護介入」という用語についての文献調査 —普及の経緯とその問題点—

樋口佳耶<sup>1</sup>, 林千冬<sup>1</sup>

<sup>1</sup> 神戸市看護大学

キーワード：文献検討, 介入, 看護介入

## Rethinking the Term "*Kainyu*" in Nursing : A Critical Literature Review

Kaya Higuchi<sup>1</sup>, Chifuyu Hayashi<sup>1</sup>

<sup>1</sup>Kobe City College of Nursing

Key Words: literature review, intervention, nursing intervention

### I. 緒言

今日、日本の看護学においてはしばしば、看護ケアを実施することを「看護介入」と表現している。しかし、「介入」は本来、「問題・事件・紛争などに、本来の当事者でない者が強引にかかわること（広辞苑, 2018）」、「当事者以外の者が入り込むこと。争いやもめごとなどの間に入って干渉すること（大辞泉, 1995）」を意味し、対象者を尊重するという看護の価値観とは相反するニュアンスをもつ。

医療・福祉分野においては、「介入」という用語の使用に疑問を呈する研究者がいる。例えば、社会福祉学を専門とする渡部（2019）は、自著において、ソーシャルワーカーが展開する問題解決・軽減のための活動を「ソーシャルワーク援助」と呼ぶ理由について、「英語圏では、日本語に訳すと『介入』となる『Intervention』という用語が使用されることもあるが、この日本語訳は両者の関係が対等ではないと誤解を招くこともあるため本書では使用しない（p.20）」と述べている。医療経済・政策学者の二木（2022）は、「日常用語として干渉、押しつけ等のマイナスイメージがある『介入』は、専門用語としても使うべきではない」と主張している。

そこで、本研究は、日本の看護学における「看護介入」という用語の普及の経緯を整理し、その中で「看護介入」という用語の適否がどう議論されてきたのかを明らかにすることを目的とした。この結果から得られた知見は、今後、看護学における「看護介入」という用語の使用を再検討するための一助となると考えた。

### II. 研究方法

「看護介入」という用語の普及の経緯を明らかにするため、2023年2月に、医中誌web版で「看護介入」をキーワードに検索を行った。その結果、8,970件の文献が抽出できた。この8,970件を年代別に分け、「看護介入」が使用されるようになった時期、件数や推移を確認した。次に、この8,970文献の表題、および閲覧できる場合は要旨を精査し、「看護介入」の定義等について論じられているかを確認した。その結果、該当する文献は見あたらなかった。

さらに、nursing intervention の和訳として「看護介入」を用いる場合があるため、同じく医中誌web版で、「nursing intervention」をキーワードに検索を行ったところ、293件の文献が抽出できた。抽出した文献の表題、および閲覧できる場合は要旨を精査し、nursing intervention の和訳や、「看護介入」の定義等について論じられているかを確認したところ、該当する文献が1件あった。さらに、看護系の学会が発行している用語集を確認したところ、「看護介入」についての記載がなされているものが1件あった。

これら2文献と、うち1文献の文献リストに記載されていた1文献を精読し、「看護介入」という用語がどのように議論され、用いられるようになったのかについて、検討を行った。

### Ⅲ. 結果

#### 1. 「看護介入」が用いられている文献数の推移(図1)

医中誌 web 版で「看護介入」をキーワードに検索を行い、得られた 8,970 文献を確認したところ、初出は 1973 年であった。その後の数年は 0 件が続き、1980 年代に入ってから年間に数件認められるようになる。1990 年代には年間 2 桁台となり、1997 年に 100 件を超え、2014 年に 554 件とピークを迎える。その後は減少するものの 3 桁台が続き、「看護介入」という用語は広く使用されていることが読みとれた。

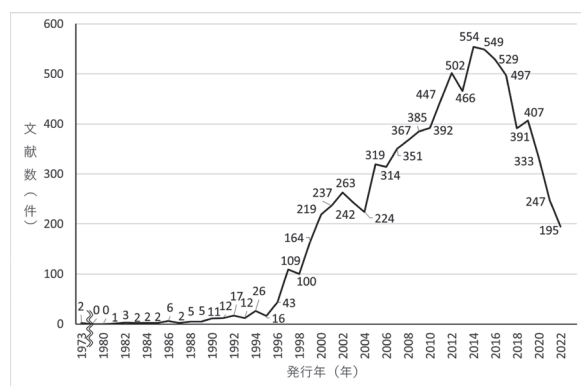


図1. 「看護介入」が用いられている文献数の推移 (全 8,970 件)  
※ 1974～1980 年は 0 件が続くため、記載を省略した。

#### 2. 「看護介入」という用語について論じられていた 2 文献

##### 1) 「数間恵子(1992). nursing intervention(ナースング・インターベンション). 看護, 44 (14), 46-54.」

本文献は、看護職の職能団体である日本看護協会の機関誌「看護」に掲載されていた。論文の冒頭で、「nursing intervention を『看護介入』と訳すことがあるらしいが、その訳語に違和感を感じる方々も多いと聞いている」と述べられており、本論文が発表された頃には、nursing intervention の訳語として「看護介入」が一般的になっていたと同時に、その訳語に疑問を呈する者が一定数いたことが読みとれる。

著者は、「『看護介入』という訳が適切か否かを再吟味する必要がある」とし、まず、nursing intervention とは何か、その定義や類語および用法について米国の文献をもとに調査している。その結果、用いる人によって定義が異なるなど、nursing intervention という用語は米国

においてさまざまに用いられ、混乱が生じていることを指摘している。ただし、nursing intervention を簡単にとらえるとするれば、「患者のために看護婦が行うこと」と理解して差し支えないとも述べている。

次に、nursing intervention の適切な訳語について論じられている。著者は、看護の性質や基本的姿勢と、日本語の「介入」が意味することは相容れず、「看護介入」という訳語は形容矛盾であると指摘し、nursing intervention を「看護援助」や「看護活動」と訳している例を好意的に紹介している。最後に、「『看護介入』は看護を押しつけるようで嫌ですね」という看護師の言葉とともに、「思想や考えは言葉によって伝わるものである。異文化で育った用語の移入・翻訳にあたっては、記号としてではなく、意味内容の対応を第一に配慮する必要がある」と指摘し、「訳語の十分な検討を怠り、安易に辞書や他領域の訳例に倣うことは慎みたいものである」と述べている。

なお、著者の数間はこの論文の執筆にあたり、中西(1987)の著書「看護で使うアメリカことば—理論用語の周辺—」における、「看護介入 nursing intervention」の項を参照していた。中西は、「“介入”という日本語はあまり語感がよくない。たとえば武力介入などぶっそうなイメージが先立つ。無遠慮に割りこんでいくあつかまさを想像させる (p.176)」と述べ、「“介入”なんて言ったら患者さんに失礼ですよとヒステリックに反応した人がいたくらいだ (p.176)」というエピソードを紹介している。そして、「筆者も数年前、『痛みをもつ患者の看護』(M.McCaffey, 1972) を訳したときに、原語 nursing intervention をすべてほかの言葉、たとえば看護ケアや看護活動に勝手に置き換えてしまった (p.176)」と回想している。

なお、中西は、nursing intervention という用語について、「とくに 1970 年代から文献上にこの言葉の使用が増え出し、nursing intervention とは何かを読者がすでに知っているという前提のもとに書かれている論文が多い割には、この言葉をはっきり定義したものが少ない (p.177)」と述べている。Nursing intervention が多義的に用いられていることは先の数間 (1992) も指摘しており、「看護介入」の原語であるこの用語は、明確な定義がなされないままに使用されていたことが伺えた。

## 2) 「日本看護科学学会 (2011). 看護学を構成する重要な用語集 .」

日本最大の看護系の学会である日本看護科学学会は、2011 年に「看護学を構成する重要な用語集」を発行している。この用語集の「ナーシングインターベンション nursing intervention」の項において、「ナーシングインターベンション」を表す言葉は、看護介入、看護技術、看護活動、看護行動など多様で、定義もさまざまであることが述べられている。その上で、「ナーシングインターベンションは看護介入と訳されており、看護介入という用語に対する疑義も聞かれるが、いずれにしても、看護職者の専門的な知識と技術に基づいた意図的な看護援助であり、望ましい成果をもたらすべく熟考された看護援助を意味していることが特徴である」と結論づけられている。ただし、「看護介入という用語に対する疑義」が具体的にどのような内容を指すのかは明記されていない。

## IV. 考察

「看護介入」の定義や用法等について論じられていた 3 文献を検討した結果、「看護介入」は nursing intervention の和訳として用いられ、普及したことが明らかになった。なお、「看護介入」をキーワードとして抽出できた文献が 1990 年代後半から急増していることから、1990 年代に「看護介入」の普及が進んだと考えられる。

ただし、数間 (1992) が nursing intervention を「看護援助」等と訳している例を紹介したり、中西 (1987) が nursing intervention を「看護ケア」等の言葉に置き換えたと述べていたりすること、「看護介入」をキーワードとして抽出できた文献は、1990 年代に入るまでは多くても年間数件にとどまることから、nursing intervention の和訳として「看護介入」が使用されるようになってからもしばらくの間は、「看護介入」という用語はあまり普及していなかったと推察される。

それでは、なぜ、1990 年代になって、「看護介入」が急速に普及したのだろうか。そして、なぜ、一部で疑義が呈されながらも、nursing intervention の和訳として「看護介入」が定着したのだろうか。以下では、これらについて考察した上で、「看護介入」という用語を用いることの問題点を述べる。

## 1. 「看護介入」という用語の普及の経緯

### 1) 看護過程の発展の中で用いられるようになった nursing intervention

ここではまず、「看護介入」の原語である nursing intervention について述べる。

中西 (1987) や数間 (1992) が指摘するように、nursing intervention はその明確な定義がなされないままに使用されてきた。ただし、もともとは、看護過程 (nursing process) における看護診断 (nursing diagnosis) の位置づけが明確にされていく中で、用いられるようになった用語である。看護過程は、そのもととなる概念が 1940 年代から用いられるようになった後 (東, 2017)、1980 年代に大きな変革と発展を遂げる。それは、看護診断によって看護過程の方向性と目的が導かれることが明確になったことである。

数間 (1992) は、「特定の看護診断として明らかにされた問題が解決した状態として、患者に望まれる成果 (Patient outcome) を設定し、それを目標として特定の看護指示を処方するのである。そして、このように特定の目標をめざした看護の行為を行うことを nursing intervention あるいは intervention という用語で表すようになった」と整理している。中西 (1987) も、1987 年時点で、「現在アメリカでは nursing intervention といえば、goal-directed actions (ある目標をめざした一連の活動) ということで暗黙の了解があるようにみえる (p.177)」と述べており、少なくとも 1980 年代は、nursing intervention は限定的な意味内容で用いられていたと考えられる。

### 2) Nursing intervention の意味内容の変化

日本看護科学学会の用語集で説明されているように、nursing intervention は現在、「看護援助」といった、非常に幅広い内容を指す用語とされる。

「Independent Nursing Interventions (和文タイトルは、「テキスト看護介入 ナースの自主的診断による患者へのアプローチ」)」の著者であるスナイダー (1998) は、米国から来日した際の講演で、「『介入』という言葉は多くの場合、アセスメント、観察、管理／経営の機能まで含む看護婦の携わるすべての活動を指すために使われてきました。そのような活動まで含めてしまうことにより、一体何が介入なのかということについて混乱が生じています」と指摘した上で、「『介入』という言葉がアセスメント、評

価、管理等を含むすべての看護活動を内包するために今までは使われていますので、私は『治療法』という言葉を使い始めています」と述べている。すなわち、nursing intervention という用語が、自身が当初想定した以上の意味を含むようになったため、他の用語を使用するようになったと語っているのである。

このように、nursing intervention は、時代とともにその意味内容が米国等で拡大していったことがわかる。その一因には、用語の定義が明確にされないまま、使用され続けたことがあると考えられた。

### 3) 日本における看護診断の普及と「看護介入」という訳語の定着

Nursing intervention という用語が用いられるきっかけとなった看護診断の概念は、1970 年代に日本に紹介され、1980 年代には全国で導入されるようになる（藤内, 2002）。看護診断は、「独自性や専門性を追求めていた看護師にとっては万能薬のように映った感があった（上鶴, 2017）」と言われるように、1990 年代の日本の看護界で脚光を浴びた。2000 年代に入ると、国の情報化戦略による電子カルテ導入の後押しを受けたことも影響し、全国のさまざまな規模の病院等で看護診断が活用されるまでになった（上鶴, 2017）。

1991 年には「日本看護診断研究会」が発足しており、これは現在の日本看護診断学会の前身である。この学会は、看護診断という概念を社会に浸透させること、「NANDA-I 看護診断」の普及に大きな役割を担ってきた（日本看護診断学会, n.d.）。「NANDA-I」とは、North American Nursing Diagnosis Association-International の略称であり、前身となる組織は 1970 年代から看護診断の標準化を目指して活動を行っている。看護診断が使用されるようになると、それに対応した「看護介入」と「看護成果」の評価についての標準化された分類が必要になり、そこで開発されたのが、Nursing Outcomes Classification (NOC) と Nursing Interventions Classification (NIC) である（森田ら, 2007）。

日本では、NIC は「看護介入分類」と訳されて導入されており、いわゆる「NANDA-I-NIC-NOC」の普及とともに、nursing intervention の訳語として「看護介入」が定着していったと考えられる。1990～2000 年代は、「看

護介入」をキーワードとして抽出できた文献が右肩上がり、急増している時期であり、「NANDA-I-NIC-NOC」が普及していった時期と重なっていることも、このことを裏づけているといえる。

なお、nursing intervention を「看護介入」と和訳した理由を明記したものは見あたらなかった。英和辞典で“intervention”を引くと、ジーニアス英和大辞典（2001）では「介入、干渉、介入」、小学館ランダムハウス英和大辞典（1994）では「介入、調停、仲裁、介入」等とあり、こういった英和辞典の記載内容が、和訳に影響していた可能性がある。

### 2. 「看護介入」が広く用いられている背景とその問題点

Nursing intervention を「看護介入」と和訳し、「看護介入」という用語を用いることの問題点は、1992 年の時点で明確に指摘されていた（数間, 1992）。にもかかわらず、この用語は現在でも広く用いられている。

日本看護科学学会の用語集（2011）には、「看護介入という用語に対する疑義も聞かれるが」という記述がある。すなわち、用語集の検討を行った日本看護科学学会看護学術用語検討委員会の中では、「看護介入」という用語への疑義は認識されていたことがわかる。しかし、「〈前略〉……疑義も聞かれるが、いずれにしても、……〈後略〉」と続けられており、疑義についての具体的な言及はなされていない。このような記載は、「看護介入」への疑義が瑣末なものであるというメッセージを読者に与えた可能性がある。さらに、このことは、日本最大の看護系の学会ですら、「看護介入」を用いることの問題点についての認識が希薄であったことを示唆している。

このように、ある用語が、本来もつ意味とは相容れない用いられ方をすることの危険性について、医療人類学者の磯野（2022）は、「『たかが言葉じゃないか、揚げ足取りだ』と思う方もいらっしゃるかもしれませんが。ですが、私はそうは思わない。言葉は力を持つからです。実際にやられていることと、それを示す言葉の距離が離れすぎていると、言葉だけが一人歩きます」と指摘している。「看護介入」を用いる看護職者の多くは、「看護ケアを実施すること」といった意味内容で使用しているであろう。しかし、「看護介入」という用語に含まれる「介入」は、本稿の冒頭で述べたように、強引にかかわる、割り込むといった強い意味をもつ。看護の対象は、あらゆる年代の個人、家族、



集団、地域社会である。こういった人々が、自身が「介入」の対象であると言われた時にどのように感じるかということを、看護の特質や倫理的側面から見直すこと、そして、看護学において「介入」という用語を使用することの是非について、再検討する必要があると考える。

## V. 本研究の限界と今後の課題

本研究は、先行研究において、「看護介入」という用語がどのように定義され、用いられているかを検討したが、該当する文献は3件と極めてわずかであった。今後は、「看護介入」の定義を明らかにせず用いている文献についても、この用語がどのような意味で用いられているかを文脈から読み解く必要がある。さらに、今回の調査で明らかになった「看護介入」の原語である nursing intervention に関連する用語の普及の推移や経緯についても調査することで、「看護介入」という用語が用いられるようになった背景や、その使用における問題点がより明らかになると考える。

## VI. 結論

本研究は、日本の看護学における「看護介入」という用語の普及の経緯を整理し、その中で「看護介入」という用語の適否がどう議論されてきたのかを明らかにすることを目的として、文献検討を行った。抽出した3文献を分析した結果、「看護介入」は nursing intervention の和訳として、1990年代に急速に普及し、定着したことが明らかになった。

「看護介入」という用語を用いることの問題点は、1992年に明確に指摘されていたにもかかわらず、現在も広く使用されている。強引にかかわる、割り込むといった、対象者を尊重するという看護の価値観とは相反する意味の「介入」という用語を使用することについて、看護の特質や倫理的側面から再検討することが必要と考えた。

## 謝辞

本研究に取り組むきっかけとなる貴重な示唆をくださった日本福祉大学名誉教授の二木立先生に心より感謝申し上げます。

## COI 申告

申告基準を満たすものはなかった。

## 著者資格

KHは研究の着想、研究デザインと実施、分析、および論文執筆のすべてを行った。CHは研究の着想、研究デザインと実施、分析、および研究プロセス全体への助言を行った。すべての著者は最終原稿を確認し、承認した。

## 付記

本研究は、The 26th East Asian Forum of Nursing Scholars で発表した内容を加筆、修正したものである。

## 文献

- 東サトエ (2017). 看護基礎教育における看護過程の理論モデルと教育プログラムの検討. 南九州看護研究誌, 15 (1), 1-9.
- 磯野真穂, 西智弘 (2022). 【対談】医療は人と人とのつながりまで介入すべきなのか? 医療人類学者が「社会的処方」に疑問を抱くわけ. 検索月日 2023 年 3 月 19 日, <https://www.buzzfeed.com/jp/naokoiwanaga/social-prescribing-isono-vs-nishi-1?bfsource=relatedmanual>.
- 上鶴重美 (2017). 看護管理者のための看護診断講座. 看護管理, 27 (7), 530-535.
- 数間恵子 (1992). nursing intervention (ナーシング・インターベンション). 看護, 44 (14), 46-54.
- 小西友七, 南出康世 (2001). ジーニアス英和大辞典. 東京: 大修館書店.
- 松村明 (1995). 大辞泉. 東京: 小学館.
- 森田敏子, 岩本テルヨ, 南家貴美代, 他. (2007). 看護診断をめぐる考察: 公開講座「看護診断セミナー: NANDA-NOC-NIC を学ぶ」を契機として. 熊本大学生涯学習教育研究, 5, 31-40.
- 中西睦子 (1987). 看護で使うアメリカことば—理論用語の周辺—. 東京: 医学書院.
- 日本看護科学学会 (2011). 看護学を構成する重要な

- 用語集. 検索月日 2023 年 3 月 19 日, <https://www.jans.or.jp/uploads/files/committee/yogoshu.pdf>.
- 日本看護診断学会 (n.d.). 理事長の挨拶. 検索月日 2023 年 3 月 19 日, <http://jsnd.umin.jp/>.
- 新村出 (2018). 広辞苑. 東京: 岩波書店.
- 二木立 (2022). 二木立の医療経済・政策学関連ニューズレター (通巻 219 号). 検索月日 2023 年 3 月 19 日, <https://www.inhcc.org/jp/research/news/niki/data/20221001-niki-news.pdf>.
- Snyder, M. (1990), 早川和生, 尾崎フサ子監訳 (1994): テキスト看護介入 ナースの自主的診断による患者へのアプローチ (初版), メディカ出版. (原著名: Independent Nursing Interventions, Second Edition)
- Snyder, M., 金山愛子, 尾崎フサ子 (1998). 看護介入: 看護の本質. 新潟大学医療技術短期大学部紀要, 6 (3), 373-379.
- 小学館ランダムハウス英和大辞典編集委員会 (1994). 小学館ランダムハウス英和大辞典. 東京: 小学館.
- 藤内美保 (2002). 看護診断, 今求められるもの. 大分看護科学研究, 3 (2), 51-54.
- 渡部律子 (2019). 福祉専門職のための統合的・多面的アセスメントー相互作用を深め最適な支援を導くための基礎ー. 京都: ミネルヴァ書房.